



Title	統語論的ミニマリズムにおける虚辞の機能について
Author(s)	荻原, 達夫; OGIWARA, Tatsuo
Citation	独語独文学科研究年報, 24, 1-13
Issue Date	1998-02
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/26068">https://hdl.handle.net/2115/26068</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_P1-13.pdf



荻原達夫

1. ドイツ語には前域に虚辞 *es* が現れる (1) のような構文がある.

(1) *Es ritten im Morgengrauen drei Reiter zum Tor hinaus.*

この *es* には何かを指し示すという働き (Referenz) が欠けており, 単なる前域の埋め草 (Platzhalter) としての機能しかない<sup>1</sup>. このことは (2) のように書きかえを行うとはっきりする. こうすると基本的な意味関係に変化を生じさせることなく *es* が消失するからである.

(2) *Im Morgengrauen ritten drei Reiter zum Tor hinaus.*

しかしながら, ミニマリスト理論とよばれる最近の生成文法理論においてこれをどう位置づけるかとなると意外にむずかしい. ミニマリスト理論では解釈上必要な要素以外は存在できないことになっているからである. 例えば (3) のような文があったとしよう.

(3) *Wer ist die Frau gekommen?*

もちろんこのままでは非文法的である. そこでこれを (4a-c) のように変更する.

(4) a. *Wer ist gekommen?*

b. *Ist die Frau gekommen?*

c. *Wer ist die Frau?*

---

\* 本稿は, 日本独文学会春季研究発表会 (1997年6月7, 8日, 慶応義塾大学日吉校舎) におけるシンポジウム『最近の生成文法理論から見たドイツ語統語論 — ミニマリスト・プログラム等をめぐって』での口頭発表にもとづいている (ただし内容的に一部変更が加えてある).

<sup>1</sup> 例えば次のような記述を参照: “*Es (=das Expletiv *es*) hat lediglich die Aufgabe, in einem Satz, in dem das Finitum an zweiter Stelle steht und die erste Stelle nicht besetzt ist, vor das Finitum zu treten und damit den freien Platz zu besetzen.”(Duden 1995: 605)*

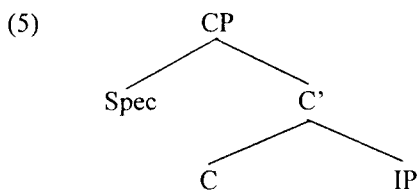
こうすると文法的になる。(3)には余計な要素があって意味不明になっているが、(4)ではそれが取り除かれているからである。では(3)のような文を一般的に阻止しているメカニズムがあるとしたら、それはどのようなものになるだろうか。厳密な定式化がどういう形になるにしても、それは結局「解釈上必要な要素以外の存在は許されない」という内容をもつことになろう。これがミニマリスト理論の中心理念なのである。この点から(1)の文を見直すとうなるか。(1)の文に現れている *es* は全体からみると余計である。解釈上存在していてもよい<sup>2</sup>。したがって(3)の文と同様のおかしさがなければならぬ。ところが実際にはそうっていない。なぜだろうか。

この論文の目的は、この問題に対して、

- 1) 虚辞構文の統語構造 (2,6 節)
- 2) 理論的に規定される虚辞の機能 (3-5 節)

の2点について考察することにより、1つの解答を与えることにある。

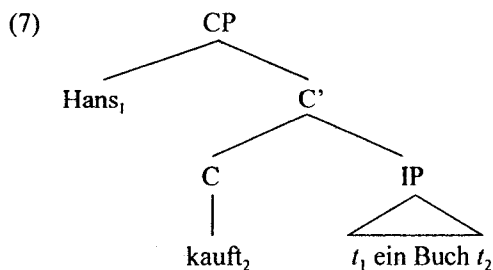
2. まず虚辞構文の構造について確認することにしよう。現在のところドイツ語の文構造として一般に仮定されている構造は(5)である<sup>3</sup>(Fanselow/Felix 1987:152, Grewendorf 1988:66f)。この構造で CP の指定部 (CP-Spec) に何か一つ句が入り、C に定動詞が入ると具体的な文となる。例えば(6)の文は(7)のような構造表示をもつ。



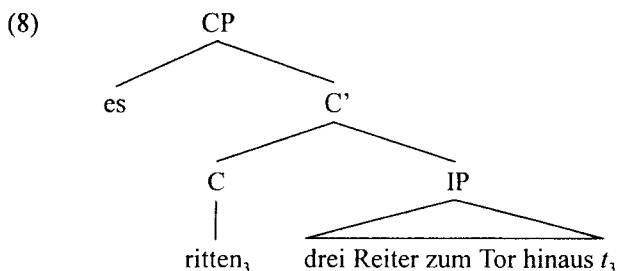
(6) Hans kauft ein Buch.

<sup>2</sup> この場合 *es* は意味内容をもたないから解釈に影響せず、したがって存在できる、という議論も可能かもしれない。言わば、(3)が不可能なのは意味内容を有する要素が余分に入り込んでいるため、虚辞とは別の問題である、とする考え方である。しかしこの考え方は成立しない。虚辞でありさえすれば全く自由に(例えば1つの文の中に好きなだけ)存在できることになってしまうからである。

<sup>3</sup> これとは別の構造を設定する考え方もある。Travis (1984, 1991)を参照。IP内部の構造に関しては、本稿の議論には影響しないので簡略表示をする。したがってIPの指定部 (IP-Spec) というときには、それが具体的にはTPの指定



構造上 CP-Spec は前域, IP は中域にそれぞれ対応するから, 虚辞構文 (1) は (8) のような構造になる.



ここで (7) と (8) を比較する. すると (7) では Hans, kauft という 2 つの要素の移動にともなう痕跡 ( $t_1, t_2$ ) が認められるのに対し, (8) では痕跡が一つ ( $t_3$ ) しか存在していない, ということがわかる. つまり, (8) に含まれる痕跡は定動詞 ritten の痕跡であるから, (8) の es は, 移動の結果そこに位置しているのではなく, 最初からそこに組み込まれたことになっているのである. 虚辞 es が, (9a, b) からわかるように, 前域にしか現れないという事実にもそのまま従うとこのようにせざるをえない.

- (9) a. Es ritten drei Reiter zum Tor hinaus.  
 b. \*Drei Reiter ritten es zum Tor hinaus.

しかしながら前域にしか現れないということが必ずしも es の移動の可能性を否定するわけではない. 「移動」は理論上の概念であるから, 移動の有無は理論的に決定しなければならないからである (これについては 6 節で論じる).

### 3. 次に虚辞の機能について考える.

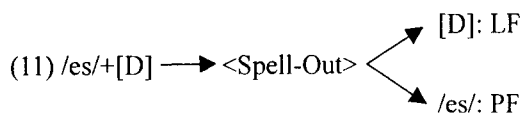
ミニマリストは PF, LF という 2 つのインターフェイスで解釈を受けない要

部なのか AgrP の指定部なのかは問題にしない.

素の存在を認可しない。したがって虚辞が存在するためには虚辞を含む派生が PF, LF で適切に処理されることが前提となる。まず PF に関してはどうか。これについては特に問題はないであろう。es そのものは音声解釈を与えられるからである。LF に関してはどうか。es には音声に関する情報を除くとその範疇素性 [D] しか残されていない (Chomsky 1995b)。なぜなら、この es には、意味素性はもちろんのこと、人称・性・数などに関する素性 (いわゆる  $\phi$  素性) すらも欠けていると考えられるからである (10 を参照)。

(10) Es sind/\*ist schon viele Gäste betrunken.

$\phi$  素性を欠く虚辞の es は主語と動詞の一致現象を引き起こさないことがわかる。だから LF では es は単に範疇素性 [D] にすぎない考えるのである。これを図式的に表すと (11) のようになる。



ここで問題になるのは、このままだと解釈不能な素性 [D] が LF で解釈を受けることになり、派生の破綻が理論的に予測される、ということである。解釈不能素性である [D] が LF に至れば必ず派生は破綻する。これは理論的要請だから避けようがない。にもかかわらず文が成立しているという事実は、[D] が途中で削除され、LF インターフェイスに至っていない、という別の可能性を示唆する。つまり (11) は厳密には Spell-Out 直後の様子を表したものにすぎず、この後さらに削除操作が加えられているとみなすのである。ただ、そうすると今度は虚辞をどう削除するかをはっきりさせる必要がでてくる。

虚辞の削除については従来次のように考えられていた (Chomsky 1986) :

まず (12) を見ていただきたい。(12) の E は虚辞を、A はその関連要素をそれぞれ表している。関連要素というのは具体的には意味上の主語をさす。ここで E を  $\text{affect } \alpha$  (Lasnik/Saito 1984/1992) とよばれる操作によって削除し、そこに A を繰り上げると (13) のような構造が生じる。

(12)  $E_{[D]} \dots A$

(13)  $A_1 \dots t_1$

(13) には解釈不能の素性 [D] が存在していない。したがって虚辞を含む構文は排除されない、ということになる。つまり、 $\text{affect } \alpha$  を適用することによ

って、違反を起こす構成物を削除できるからこそ、結果的に虚辞構文は存在できるのだ、ということである。例えば (14) を見ていただきたい (es が E に, drei Reiter が A に相当する)。ここで es を削除し (15a), drei Reiter をくり上げると (15b) のようになる。

(14) es ritten drei Reiter zum Tor hinaus.

(15) a. \_\_\_\_\_ ritten drei Reiter zum Tor hinaus.

b. drei Reiter<sub>1</sub> ritten t<sub>1</sub> zum Tor hinaus.

(15b) には解釈不能な要素が含まれていない。したがって適格な構成物であるとみなすことができ、派生は収束する。ただし、この考え方には注意すべき点が 2 つある。1 つは, affect  $\alpha$  の適用に制限はないのか, という点。もう 1 つは, ドイツ語の場合虚辞と主語は直接関係しているのか, という点である。第 1 の点は理論に関する問題, 第 2 の点は言語事実に関する問題といえる。

4. まず第 1 の点について考えてみよう。affect  $\alpha$  の適用に制限がないとするとどうということになるだろうか。(16), (17) を見ていただきたい。

(16) \*... daß es Bücher auf dem Tisch liegen. (vgl. Es liegen Bücher auf dem Tisch.)

(17) ... daß Bücher auf dem Tisch liegen.

両者を比べるとすぐにわかるように, 定動詞 2 位が形成されていないこの場合 es は入れない。しかしながら, もし affect  $\alpha$  が適用可能であるならば, この虚辞は Spell-Out の後で削除可能なはずで, (16) を違反とする根拠が失われてしまう。したがって affect  $\alpha$  の適用による分析はこのままでは使えない。少なくとも affect  $\alpha$  の適用条件 (14 には適用できるが 16 にはできないとするための条件) を明確にする必要がある。

第 2 の点についてはどうだろうか。例えば (18) の文は少なくとも (19a, b) のように 2 通りの書きかえができる。

(18) Es liegen Bücher auf dem Tisch.

(19) a. Bücher liegen auf dem Tisch.

b. Auf dem Tisch liegen Bücher.

(19a) だけでなく (19b) も可能であることから, 虚辞と交代しうるのは必ずしも主語に限らない, ということがわかる。これはたとえば英語の there 構文などと異なるところで, 「虚辞の位置は主語の位置」とは必ずしも言い切れないのである。ただし主語に全く無関係というわけでもない。虚辞構文にはいわ

ゆる定性効果がよく観察されるが、これはドイツ語の場合でも例外ではないからである (荻原 1993, 1994) :

- (20) a. Es stieß ihn ein Soldat von der Brücke.  
b. \*Es stieß ihn der Soldat von der Brücke.  
(vgl. Da stieß ihn der Soldat von der Brücke.)

このことから、虚辞と主語との間には何の関係もない、とも言い切れないということがわかる<sup>4</sup>。

以上のことから、第1の問題点については、まず虚辞を削除するための条件をはっきりさせる必要があるということ、第2の問題点については、虚辞と主語の関係は、それがあつて認められるとしても、英語と違って直接的ではない、ということになる。この点で従来の分析には改良すべき点があると言わざるをえない。

5. ここでこれを最近の生成文法理論ならどう分析するか考えてみる。まず、削除のような規則の適用に関しては Chomsky (1995:280) が (21) のような規定を示している。

(21) A checked feature is deleted when possible.

“when possible” というのは、削除しても差し支えない素性、すなわち LF で解釈不能な素性である場合には、という意味である。虚辞の素性 [D] はすでに述べたように解釈不能であるから、照合しさえすれば削除は可能になる。つまり、虚辞の非合法性を取り除くには、まず虚辞がもっている素性 [D] を照合しておかなければならない、ということである<sup>5</sup>。では、この場合の照合は具体的にどのようなプロセスで行われるのだろうか。

Chomsky (1995b) は次のように考えている<sup>6</sup>。(22) を見ていただきたい。

- (22) a. E<sub>[D]</sub> ... A<sub>[N]</sub>  
b. [A<sub>i</sub> E] ... t<sub>i</sub>

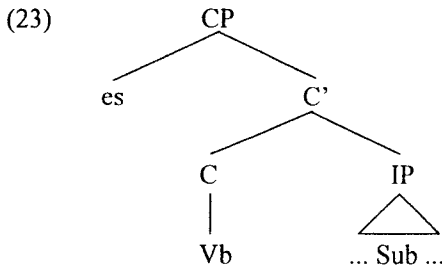
<sup>4</sup> 英語の虚辞 *there* は IP-Spec に位置するため、構造的にも主語と関係が深い。ドイツ語の *es* は CP-Spec に位置しているから、この点でも関係がゆるい。

<sup>5</sup> 虚辞そのものを直接削除するのではないことに注意。いわゆる *bare phrase* 理論を採用すると、虚辞そのものの削除は、禁止されている “term” の削除を行うことになるからである (Chomsky 1995a を参照)。

<sup>6</sup> 照合が成立するための厳密な定義については Chomsky (1995b) を参照。

虚辞 E は先ほど述べたように素性 [D] をもっている。それから、虚辞の関連要素 A は不定名詞句だから、素性としては [N] をもっている。[D] と [N] は名詞句においては照合関係に入ることがわかっているから (Longobardi 1994), これに似たプロセスを虚辞 E と関連要素 A にも設定し (22a), LF で A の素性 [N] が E の素性 [D] の照合を行うようにする。こうすれば, (22b) のように, LF で違反を引き起こす [D] が照合され, それに引き続き削除することができる, というわけである。このようにすれば, 先に見た第 1 の問題点を取り除くことができるであろう。(14) と (16) の差は照合理論から導き出せばよいという方針がえられるからである。しかし, このままでは E (虚辞) と A (主語) の関係という, もう 1 つの問題が解決されずに残ってしまう。

6. E と A の関係という問題を解決するために, ここでもう一度虚辞構文の統語構造について考えてみたい。すでに述べたように, ドイツ語の虚辞構文は (23) のような形をしている。



(23) の Vb は定動詞, Sub は主語をそれぞれ表す。ここで虚辞の機能に関して何が明らかになっているかもう一度確認しよう。まず,

1) es の機能は前域 (CP 指定部) を埋めることにある。

そしてミニマリストは素性の照合を中心に理論を組み立てているから, 虚辞が CP 指定部を埋めるということは

2) CP の主要部 C と虚辞が何らかの素性の照合を行っているということになる。さらに

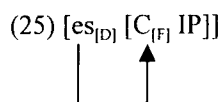
3) 虚辞の素性は範疇素性の [D] であるということもわかっている。

この 3 つの点からすぐに思いつくのは, es と C は [D] 素性を介して関連付けられている, ということであろう。しかしながら, この場合 C が素性 [D] を引き付けているとは考えにくい事実がある。(24) のような文からもわかるように, CP 指定部には [D] をもたない要素も現れうるからである。

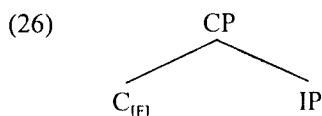
(24) Gestern hat Peter zwei Maß Bier getrunken.

このような、[D]に限らず何でも引き付ける性質をもつ C の素性をここで仮に [F] としよう。C がそのような素性 [F] をもっているとするれば、前域にさまざまな範疇の要素が現れる理由がとりあえず説明できるようになる。この素性 [F] は LF では解釈されないから<sup>7</sup>、照合によって削除されなければならない、したがって 1) は

1') 虚辞 es の機能は [F] を照合することにある  
というように言いかえることができるだろう。これを図で示したのが (25) である。



es の機能がこのような照合関係を成立させることにあるとすれば、なぜ虚辞が CP 指定部に限定されるのかも説明できるだろう。派生がたとえば (26) のような段階に至ったとする。



ここで Numeration<sup>8</sup>に虚辞 es があるとすると、素性 [F] を照合するには 2 通りの方法が考えられる。1 つは IP の中から任意の要素を繰り上げる方法で、もう 1 つは虚辞 es を CP に直接 Merge する方法である。この場合要素の移動よりも Merge のほうが経済的であるというミニマリストの仮定があるから、ここでは後者が選択されることになる。つまり (26) からは必ず (25) が生じることになる。

さて、ここで E と A の関係について考えてみよう。まず (27a) と (27b) を比べていただきたい。

(27) a. weil ja doch [Kinder auf der Straße spielen]

<sup>7</sup> [F] は例えば [topic] のような、ある種の意味内容を有する素性であると考えられるかもしれないが、ここでは別の考え方をとる。後述を参照。

<sup>8</sup> 派生の起点となる語彙の集合を Numeration とよぶ。詳しくは Chomsky (1995b:225-227) を参照。

b. weil Kinder ja doch [auf der Straße spielen]

(27a) も (27b) も主語名詞句の解釈には違いはあるが、どちらも文法的である。この場合主語を角括弧 ([ ]) で示した領域内に置いても、その外に置いても文としては成立するというを確認されたい。ここでこれを虚辞構文に書きかえてみるとどうなるか。(28) がその結果である。

(28) a. Es spielen ja doch [Kinder auf der Straße].

b. \*Es spielen Kinder ja doch [auf der Straße].

(28b) の許容度が低くなっていることがわかる。これを一般的に表したのが (29) である。

(29) a. es Vb [... Sub ...]

b. \*es Vb Sub<sub>i</sub> [... t<sub>i</sub> ...]

角括弧内の領域が具体的に何か (VP か TP か AgrP か、それとも他の何か) は別にしても、主語が繰り上がる典型的な位置は IP の指定部だから、(27b) の主語は IP の指定部にあると考えることができる。同時にまた (28b) から、虚辞構文においては IP の指定部には主語を繰り上げることができないということもわかる。E が存在しているとき A は角括弧の領域から出られないのである。なぜだろうか。

もう一度 (27) を見ていただきたい。もしドイツ語の I がつねに強い素性をもっているのだとしたら、(27a) の成立しうる理由を探さなくてはならない。逆に弱い素性しかもっていないのであれば Procrastinate (Chomsky 1995b:198) のために (27b) が排除されてしまう。この矛盾を回避するには、

1) ドイツ語の I は強い

としたうえで、

2) IP の指定部に虚辞がある

とするのが一つの方法であろう。ただしこの虚辞は音声的には現れないから、音韻素性を欠いているとしなければならない。つまり (30) のように考えるわけである (音形をもたない虚辞を Exp で表す)。そうすれば (28b) も (31) のように考えて解決できるかもしれない。

(30) weil Exp ja doch Kinder auf der Straße spielen

(31) es spielen Exp ja doch Kinder auf der Straße

しかしながらこれには問題がある。es も Exp も LF ではともに素性 [D] と

っているわけだから、どちらも素性 [N] によって照合されなければならない。例えば (32) ではまず [D]<sub>2</sub> が [N] をひきつけることになるが、そうすると結果は (33) のようになる。

(32) [D]<sub>1</sub> ... [D]<sub>2</sub> ... [N] ...

(33) [D]<sub>1</sub> ... [<sub>D</sub> N D]<sub>2</sub> ... t<sub>N</sub>

(33) の配置では [D]<sub>2</sub> は [N] によって照合されているので問題ないが、[D]<sub>1</sub> が照合できなくなっている。[D]<sub>2</sub> は全体としては [D] であって [N] ではないので、[D]<sub>1</sub> への繰り上げができないからである (Chomsky 1995b:372)。したがって (31) のような、E<sub>1</sub> ... E<sub>2</sub> ... A を設定する分析には理論的に無理のあることがわかる。音形をもたない虚辞が使えないのだとすると、残るは音形のあつる虚辞 es を使って、(34) のようにその es を移動させる方法しかない<sup>9</sup>。

(34) es<sub>i</sub> spielen t<sub>i</sub> ja doch Kinder auf der Straße

この場合、C が確実に es を引き付けるためには、C の誘引が es において最も経済的でなければならないが、これは es が意味素性を欠く虚辞である限り自動的に成立していると考えることができる<sup>10</sup>。ただ、もし (34) が可能であるとする、音形のない虚辞を繰り上げた (35) も許されなければならない。

(35) Exp<sub>i</sub> spielen t<sub>i</sub> ja doch Kinder auf der Straße

つまり (35) と (34) の LF 表示は同じはずだから、もし (34) の派生が LF で収束するのだとしたら、当然 (35) も許されなければならないことになるのである。(34) と (35) では Spell-Out 以後では区別がつかないわけだから、これは N(umeration)→λ(LF 表示)の問題としてよりもむしろ N→π(PF 表示)の問題としてとらえざるをえないだろう。ここでもう一度 (25) の図を見ていただきたい。

---

<sup>9</sup> こうすると第2節で示した es を直接 CP 指定部に Merge するという考えは捨てなければならないことに注意されたい。

<sup>10</sup> これに関しては Kitahara (1997) を参照。要素の移動が要素のコピーと要素の結合 (concatenation) からなるとすると、意味素性をもつ要素を移動させた場合、その要素が2重に解釈される (コピー先とコピー元の位置で) ことになるから、それを防ぐため、コピー先の意味素性を削除しなければならない。移動が意味素性をもたない要素 (虚辞) の場合、こうした削除は不要になり、操作がワンステップ少なくて済む。

(25) [es<sub>[D]</sub> [C<sub>[F]</sub> IP]]

この構造では C の素性 [F] が虚辞の素性 [D] によって照合されることになっていた。しかしこれでは、今見たように、es でも音形のない虚辞 Exp でも同じことになってしまう。(36) でも (25) でも素性の位置関係については同じだからだ。

(36) [Exp<sub>[D]</sub> [C<sub>[F]</sub> IP]]

しかし、もし [F] が統語素性ではなく、音韻素性にかかわるものであると考えたらどうだろう。es と Exp の差は (37) のように音韻上の差にほかならないからである。

(37)

	N → π	N → λ
es	/es/	[D]
Exp	---	[D]

ここで PF 表示で意味をもつ素性を一般的に [P] という記号で表し、(37) をさらに (38) のように書きかえる。

(38)

	N → π	N → λ
es	[P]	[D]
Exp	---	[D]

こうすると (25) の構造にある [F] という素性は音韻素性 [P] によって照合されなければならない素性であると規定することができる。これは verb second constraint という現象の直観的内容としても自然であろう<sup>11</sup>。ごく一部の例外を除けば原則として何でも前域に立つことができるのは、ふつうの語彙はみんな音形をもっているからであるし、また verb second のということばの中

<sup>11</sup> それに [F] が必ず Spell-Out の前に照合されなければならないということもここから自動的に導き出せよう。Spell-Out の後では PF 素性は利用できなくなるからである。

の second は音形のある語句をその前に置いてはじめて意味をなすからである。逆にいえば verb second を満たすだけならどんな要素を置いても構わないわけで、例えば (39) では素性 [F] は照合されており、その点に関しては何の問題もない。

(39) Er spielen ja doch Kinder auf der Straße.

しかし (39) は全体としてはおかしい。冒頭で触れたように、これでは余計な要素 (Er) が意味解釈まで残っていてまずいことになる。したがって Numeration に入っていて、かつ意味解釈に支障をきたさない要素となると虚辞 es あるいは音韻素性 [P] をもたない虚辞 (Exp) ということになり、その中でさらに verb second を満たすもの、すなわち C の素性 [F] を照合しうるものとなると es に限られるのである<sup>12</sup>。

7. 以上の議論をまとめよう。ミニマリスト理論における虚辞 es の機能は、一般に仮定されている統語構造を前提とすると、

- 1) I の強素性を照合する
- 2) C の素性 ([F]) を照合する

の 2 点に求めることができる (ただし、[F] は [D] のような範疇素性ではなく、音韻素性によって照合されるものとする)。そしてこの 2 つの機能のうち

- 3) I 素性の照合だけが求められるときは Exp が用いられる (音声的には実現されないが主語の繰り上げを阻止する)。
- 4) I 素性と C 素性の両方の照合が必要なときは es が用いられる (IP-Spec に Merge され、それから CP-Spec に繰り上げられる)。
- 5) C 素性の照合だけが求められるときはどちらの虚辞も現れない (CP-Spec には es も Exp も Merge されない)。

虚辞は意味内容を欠いているから、本来は不要な要素である。だからその機能が他の要素によって行われうる場合には決して出現しない。したがってミニマリスト理論の枠内では、虚辞構文は、虚辞が素性を照合するという本来の機能を発揮できる限りにおいて、許されるのである。

---

<sup>12</sup> 音韻素性をもたない Exp はその代わり次のようなときに用いられる：

(i) [auf der Straße]<sub>i</sub> spielen Exp ja doch [Kinder t<sub>i</sub>]

C は [P] のない Exp を引き付けられないから、この場合 Exp は IP-Spec にとどまることができるのである。ここで Exp の代わりに es を使って (ii) のようにすることはできない。

(ii)\*[auf der Straße]<sub>i</sub> spielen es ja doch [Kinder t<sub>i</sub>]

auf der Straße の移動よりも es の移動のほうが経済的だから (ii) は阻止されるのである。

文献

- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language*. New York.
- Chomsky, N. (1995a) "Bare Phrase Structure." In: Webelhut, G. (ed.)  
*Government and Binding Theory and the Minimalist Program*. Oxford. 383-439.
- Chomsky, N. (1995b) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.
- Duden (1995) *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*.  
Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich.
- Diesing, M. (1992) *Indefinites*. Cambridge, Mass.
- Fanselow, G./S. W. Felix (1992) *Sprachtheorie 2*. Tübingen.
- Grewendorf, G. (1988) *Aspekte der deutschen Syntax*. Tübingen.
- Kitahara, H. (1997) *Elementary Operations and Optimal Derivations*.  
Cambridge, Mass.
- Lasnik, H./M. Saito (1984) "On the Nature of Proper Government." In: *Linguistic Inquiry* 15. 235-289.
- Lasnik, H./M. Saito (1992) *Move  $\alpha$* . Cambridge, Mass.
- Longobardi, G. (1994) "Reference and Proper Names: A Theory of N-movement in Syntax and Logical Form." In: *Linguistic Inquiry* 16. 609-665
- 荻原達夫 (1993) 『es-動詞-主語構文の統語構造と意味構造』 独語独文学科研究年報 20. 249-265 頁. 北海道大学.
- 荻原達夫 (1994) 『es 構文の成立に関する研究』 独語独文学科研究年報 21. 15-29 頁. 北海道大学.
- Travis, L. (1984) *Parameters and Effects of Word Order Variation*. Diss. MIT.
- Travis, L. (1991) "Parameters of Phrase Structure and Verb-Second Phenomena." In: R. Freidin (ed.) *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. Cambridge, Mass.

(日本学術振興会特別研究員)